
にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

ミケ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃんこ(?)に転生ですか? よろしい、ならばネギま!
に転生だ

【Nコード】

N0406Y

【作者名】

ミケ

【あらすじ】

死んだ(消滅)↓幼女↓ネギまに転生↓化け猫無双の話です。
文才もこの先の展開もまったく無いのに、ノリと勢いで書いてしまった作品です。

誰か助けてorz

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)(前書き)

初投稿です。

駄文です。

見切り発車です。

文才皆無です。

ですが、後悔はしていない。キリッ

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)

目が覚めると、そこはたらいの中だった。

「(これは『なかなか良いたらい(木製)』だな)」

「(・・・・・・・・)」

「(・・・・・・・・)」

「(ふう)」

そろそろ現実を見ようか(お前にたらい(木製)の何がわかるんだ？というツッコミはなしで)

「(どうしてこうなった!)」

いや、焦るんじゃない。

まず今の状況を整理して、冷静に対応するんだ!!

Q 俺の名前は？

A ただ今名無しです

Q 年齢は？

A 一応転生直後だから0歳のはず

Q 今の状態は？

A どこからどう見ても仔猫です

Q とりあえず何故仔猫？

A ……少し心当たりがありますが今はどうでも良いです

Q 今の状況は？

A たらい（木製）の上のにゃんこ状態で川を流れてます

Q 泳げますか？

A 仔猫なので溺れます
♪

Q この状況で冷静になれますか？

A 無理です 誰か助けて下さい

Q 誰のせいですか？

A 確実にあいつのせいです（怒）

Q 今、一番やりたいことは？

A この状況から抜け出してあいつにO・H・A・N・A・S・H・Iした
いです
♪

まあ何故こんなことになったか考えてみるか、うすうす気が付いて
はいるんだが……

それは遡ること数時間前

「知らない天井だ」

なぜか言わなければいけない気がした。後悔はしていない！

ん？何か電波が入った気がするが気にしない

「ここはどこだ？」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

土下座している幼女（さらさらの金髪）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「・・・・・・・・」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものつつつすぐく土下座している幼女（ふるふる震えてる）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「・・・・・・・・」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものつつつつつつすぐく土下座している少女（上目遣い＋涙目でちらちら見てる）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「（これはアレなのかっ！？アレしかないのかっ！？）」

今俺の目の前には、

1 真っ白な空間

2 テンプレ少女による土下座

フム、この二つの状況から導き出される答えは

「よろしい、ならば転生だ！！」

「ふうえっ？！（ビクッ！）う、うええええええええええんんんんんんん！！！！（いきなり的大声に驚き、涙を流して逃げる少女）」

「

ピンポン ♪ 幼女を落ち着かせるまでお待ちください

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)(後書き)

同日に編集って・・・

ごめんなさい!!

第零話 よろしい、ならば死に際だ（前書き）

今回は、短いです。

第零話 よろしい、ならば死に際だ

さらに遡ること数時間前

俺、桐谷悠樹^{きりやゆうき}は悩んでいた。それは、今週末の義妹の誕生日プレゼントを買ったためだ。

俺の家族は、父、義母、義妹、俺、の四人家族だ。

母親は体が弱かったため、俺が3歳のときに病気で亡くなった。

そして、俺が小学校に入学したころ父親が今の義母と再婚した。

義母には俺と一つ違いの「香織^{かおり}」という娘がいた。だが、再婚して間もなく両親の仕事が忙しくなり、香織の面倒は俺がみるが多くなっていった。

自慢じゃないが香織はかわいい。きれいな黒髪、白い肌、可愛らしい瞳、ピンク色の唇。（イメージとしては某友人が少なさそうな人の集まりの戦国武将の名前の女の子を黒髪にした感じ）

そして、幼いころいつも自分の後を付いてきて楽しそうに笑う義妹のことを本当の妹のように可愛がってきた。

そんな大切な妹のために、バイトの給料一か月分（今月は5万）を

持ってプレゼントを買いに来たわけだが

「――良い物が見つからない――」

どれだけ探しても『これだっ！』というものが見つからないため
学校が終わってから二時間ほど雑貨屋やアクセサリーショップを彷徨っていた。

「（そろそろかえらなきゃいけないか）」

日が傾き始めそろそろ帰ろうかなどと考えながらアクセサリー店を出て歩いていると、ふと近くにあった雑貨店が目を引いた。

ガラス越しに見えたものに視線が止まる

「（おおっ！これはなかなかいいな）」

自分の中で『これだっ！』という感覚があり、迷わずそれを手に取った。

いい物を買ったとご機嫌な帰り道

財布の中身がほぼ無くなり明日の昼飯をどうしようかと考えながら歩いていると、少し先に香織の姿が見えたので買ったアクセサリーを隠した後、驚かせてやろうと後ろからゆっくり近づいてポンツと両肩に触れた瞬間

意識が白に覆われた

第零話 よろしい、ならば死に際だ（後書き）

今日中にもう一話いきたいです
同日に改定中

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (前書き)

幼女の話し方え

完成度が低いミケを許してください

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2)

少し熱くなつてしい幼女を怯えさせてしまった。

その後、幼女を落ち着かせるのが大変だった。

落ち着かせるために頭を撫でたらものすごく懐かれた。(金色の髪
の間に猫の耳が見えた)

とても可愛かったのもつと撫でテクを披露したらものすごいこと
になった。(想像にお任せしますby作者)

ピンポーン♪ 幼女が落ち着いたので説明してもらっています。

「簡単にまとめると、

1 幼女は神様である

2 私生活や仕事のストレスから酒を飲みまくって酔っ払った(神
様はエターナルロリータです)

3 そのまま寝てしまい風邪引いた

4 それでも仕事はやってくる

5 がんばったが、失敗した

6 俺の存在が消滅

7 魂回収+土下座

8 説明中↑今ここ

というわけだな」

幼「は、はいそうなんですぅ／＼。クチュンッ！

もどそうとしたけど手遅れでどうにもならなくてえクチュンッ！

それであなたあ・・・桐谷悠樹きりやゆうきという存在を消してしまいましたあ
クチュンツ！」

お前のせいかと思うと怒りが沸いてくるが、これだけ申し訳なくされ
ると怒ることもできない。

そして雰囲気が妹に似ている。

俺はまだ高一で、まだまだたくさんやりたいことがあった。

俺は彼女も欲しかったし、マンガやラノベの新刊も読んでいないし
大切な義妹の誕生日プレゼントも渡せていない。

「存在が消滅って言うのはどんな意味なんだ？」

幼「あなたがいたと事実がなくなつてえ、いなかったことになりま
すう、ほんとうにごめんなさいい（涙）クチュンツ！」

「
——そうか」

「（死んで悲しまれるよりは存在が消えてしまったことが救いな
のかもしれないな）」

幼「あのうゝ考え事しているところ申し訳ないのですがあ、今後の

ことでお話があるのですがあ。クチュンツ！」

すっかり忘れられていた神様（幼）

幼「ん？なにか馬鹿にされたような気がしますけどあ、今はいいですう。クチュンツ！たぶん判っているとは思いますがあ、元のセカイの輪廻の輪から排除されてしまったあなたは元のセカイに戻ることはできないのでえ

1 別のセカイにトリップ

2 別のセカイに転生

3 ちよつと強引に神格化して部下に／／／（ポツ）

4 ！（絶対にさせませんが）消滅

の4つから選んでもらいますう。クチュンツ！」

ふむ、4は勿論なし、3は大変そうだから嫌、2か1だな。
とゆうか3はどうやるんだ？

「3はどうやるんだ？」

「それはあ／／／簡単ですけど言いにくいのでえ．．．
実際にやりますかあ／／／」

かみさまのターン

かみさま（ほしよくしゃ）のどうこうがたてにわれている。
ゆうきはていそうのききをかんじた。こうかはばつぐんだ！！

ゆうきのターン

ゆうきはごういんにはなしをもどした。
ゆうきはにげきった！

「どんな世界に行くんだ？」

これは大切なことだ。心構えがあるかないかではだいぶ違う。決して逃げたわけではないんだっつ！

幼「むう、ざんねんですう（ボソツ）。なら、1か2ですねえ。クチウンツ！逝ってもらうセカイは私が管理しているセカイになりますからあ

1 / ●弾の●リア

2 / 魔法先生ネギま！

3 / ●イスクール・オブ・ザ・●ッド

4 / P S Y R ● N

の4つのセカイのどれかですねえ。クチウンツ！」

はいアウトオオオオオオオオオ！！！！

普通の世界でいいのにヤヴァイフラグがいつぱいだああああ！！！！（特に3は悪意しか感じられない）

「3と4はなしで、あんなに危ない世界には逝きたくない！となると1か2だが、ネギまのほうが好きだからネギまに転生させてくれ」

アンチするかは気分と立場しだいだな

幼「ネギまのセカイですねえ。クチユンツ！転生すると元の名前は忘れてしまいますう。本当は記憶も消えるんですけどおサービスですう。それと特別に名前をぶれんとしますう（最初のプレゼントが名前／／／）あとは、お詫びにいくつか願い事を叶えますから何がいいですかあ？クチユンツ！ちよつと無茶なことでもいいんですよ／／／」

「（ゾクツ）・・・なら、家族が幸せに暮らせるようにしてくれ。あと義妹に俺が買ったプレゼントを渡してくれ。あとは氣と魔力を無限にして、身体はできるだけハイスペックにしてくれ」

幼「能力とかはいいんですかあ？いろいろ付けますよう？クチユンツ！」

これはもう決めてある

「そうだな。あらゆる効果を付与した魔道具を無から創造できる能力『魔具創造』の能力をくれないか」

幼「いいですよーいろいろいじって死……ないようにいろいろ強化しておきますう。クチュンツ！もういいんですかあ？クチュンツ！」

「ああ、なら送ってくれ」

幼「わかりましたあ、でもその前におねがいしていいですかあ？クチュンツ！」

「ん、なんだ？」

幼「実は私には名前がないんですう。クチュンツ！あなたに付けてもらいたいんですけどお良いですかあ？／＼クチュンツ！」

「それぐらいならいくらでもいいぞ
なんてどうだ？」

そうだなあ、アルスな

アルス「アルスですかあ／＼／＼ではあなたには
——
と言う名前を送りましょう。クチュンツ！私から送られる名前な
ので私という神との縁が深くなりますよう。それではいつてらっ
しゃい。死んだら私のところに来る様にしましたけど（ボソツ）」

「えっ、な」
——

彼の身体が光りだして一瞬の後消えた

アルス「じゃあ、サクサク書き換えましょう。クチュンツ！」

アルス（幼女）は書類になにかを書き込み始めた

アルス「なんだか気分が良いですね。クチュンツ！ふわふわし
ます。クチュンツ！」

だがアルス（風邪）は気づかない。自分が思っていた以上に風邪が
酷かったことに。

だから、あんな悲劇が起こってしまい慌てていろいろ付け加えたの
はまた別の話。

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (後書き)

神様(幼女)の名前はギリシャ神話の月の女神アルテミスからとりました。
アルス

同日改定

主人公設定＋アルスの失敗（前書き）

やっと主人公設定

後悔は、していないっ！キラッ

主人公設定+アルスの失敗

主人公設定

旧名 桐谷悠樹 (きりや ゆうき)

新名

性別 男

年齢 0歳 (16歳)

種族 ???

容姿 人VER 十人中八人がかつこいいと言う容姿 (BLACK CATのトレイン「ハートネット」 肉体変化によって20歳頃まで変更可能)

猫VER 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感

能力値 (F a t e 風) 「」は猫時

筋力 A - 「B -」

耐久 C + 「C -」

敏捷 A 「S -」

魔力 EX

気 EX

幸運 S (アルスの加護)

能力

名称 魔具創造 (アイテムメーカー)

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこの

かの最大魔力の30%近く必要である。（魔道具によって変化）

名称 神からの贈り物（ギフト）

効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈った

名前をもらったことも関係しており、さまざまな効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）

効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）

効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそろい／＼／＼」と言うわがままから付与された能力

完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変化することができる

名称 完成（ジ・エンド）

効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力

e t c , , , , , , , , , ,

名前 アルス

性別 女

年齢 エターナルロリータ

容姿 金髪、猫耳、尻尾付き ちっこくてかわいい

実は月を司る神様

性格 ドジ 少し黒い 甘えたがり

能力値（F a t e 風）

筋力 神様だもん

耐久 神様だもん

敏捷 神様だもん

魔力 神様だもん

気 神様だもん

幸運 神様だもん

能力

名称 神様だもん

能力 戦うときには諦める

ナニこれ理不尽 by「徹夜明けのハイテンションでやっちゃった」
と語る容疑者_{ミケ}

アルスSIDE

神が存在する場所と人間が存在する場所では時間の流れが異なる。
神は大量の仕事をゆつくりとした時間の流れの中でこなしていく。
（それでも仕事が多くてストレスが溜まるが）

アルス「あれえ？これはどうゆうことでしょう？（汗）」

そのため、それに気づいたときには風邪が治っておりすぐに自分が失敗したことに気がついた。

アルス「決して撫でられたのが気持ちよかったとかあ、自分の好きなタイプだったとか考えていたわけじゃあないんですからねえ」。勘違いしないでくださいよう」

決してツンデレでもどうしようもないため、神は彼のために書類に手を加え彼に手紙を送った。

アルスSIDEEND

主人公設定＋アルスの失敗（後書き）

名前とアーティファクトが未定な件にいて
申し訳なく思っています。

ヒロインどうしよう（汗）

アンケートをとりたい、、、、

第3話 よろしい、ならば確認だ（前書き）

どうにか名前は決まりましたが

アーティファクト、ヒロインと問題は山積みです。

こんな粗末なものでいいならどうぞ

第3話 よろしい、ならば確認だ

SIDE

我輩は仔猫である。名前はまだない。

違うんです。言ってみただけなんです。ほんの出来心と徹夜明けのテンションのせいなのです。だからモノを投げつけないでください。ほんとにゴメンナサイ。調子に乗りました、スミマセンデシタ。

……電波を受信していたみたいですね。もう大丈夫です。進めましょう。

さて未だに流れ続けている私ですが何もできないので、この『なかなか良かったらい（木製）』のなかでゆっくりくつろいでいました。だってどれだけ強くても祿に制御できない仔猫ですよ？身動きが取れません。しかもこの『なかなか良かったらい（木製）』のサイズは

仔猫三匹分といったところでしょうか、ものすごくくつろげますし落ち着きます。一人猫鍋状態です。

口調が少し変わっている気もしますが転生の影響でしょう。そこまですでにしません。それより此処がどこかと何故こうなったかが気になります。

そこでふと何か違和感を感じ（転生してから感覚が鋭くなったように）、『なかなか良いらしい』の底を見ると

文字が浮き出ていました。ちゃんと文字が消えるのか心配です。

「こんにちはあ、アルスですう。少し失敗しましたあゝごめんなさいですう。

ナニを間違えたかというと種族ですう。本当は人間としていてもらう予定でしたがあ、私がいろいろ弄ったのでセカイに人として認識されなくてエラーが出てしまい今の状態（私と同じ猫状態）と言っわけなんですう。

修正はしたのもう大丈夫ですからあ思う存分生きてくださいい。

私はここで待ってますよう（行っちゃうかもしれませんが）。あとお、そこは並列セカイなのでえ原作ブレイクしてもかまいませんからあ。今は大戦の十年前のイギリスの田舎ですからあ。それに十年間も修行する時間がありますからがんばってくださいねえ

それではあ、能力情報、種族名（私がつけましたあ）、あなたの名前（これも私がつけましたよう）、そのほかのいろいろな情報を送りますからねえ、普通なら廃人確定ですが安心してくださいい決して痛くしませんし廃人になんてなりませんからあ。

まあ少しチクリとするかもしれませんが それくらいは大丈夫ですよねえ じゃあいきますよう」

数秒後、頭の中に異物が入り込むような感覚があり、鈍い痛みの後
に一気にたくさんさんの情報が入り込んできた。

だがそれも数秒で終わり、まだ違和感と気持ち悪いが今の状況を理
解した。

まずは自分の名前のこと。これは、神様からもらった名前のほうで
自分の名前は自分で思い出すことができません。そして、私が神様
から貰った名前は『リゲル』そして種族は・・・『古猫^{こねこ}』？ よ
くわかりませんが単純に霊格の高い猫つまり猫族の上位種でしょう。
その霊格はかの龍樹や真祖の吸血鬼と同格かそれ以上らしいです・
・

何だかヤツちまった感がすごいですね。しかもこれ不老不死じゃな
いですか？
少し試してみましようか・・・

リゲルSIDE

少しやりすぎちゃったりゲルです。なにぶん初めてだったものですから加減が難しく、魔力と気が放出してしまい、それが混ざり合い・

周りが爆発しました。そのおかげで、岸まで着きましたが周りはぼろぼろです。

ん？私ですか？すぐに回復しましたよ。もうすでに人外ですからこの程度じゃ痛くも痒くもありませんね。ですが、冷静に考えればわかることなので少し焦り過ぎてしまっていたようです。

そんなことよりすごいのがこの『なかなか良いたらいい（木製）』です。傷ひとつついていません！この『なかなか良いたらいい（木製）』は実に良いパートナーになりそうです。

さて、陸にも付けたので早速能力の確認をしましょう。まずは、人型になれるかどうかですね。

身体に流れる力を徐々に人の形に変化させていく、そして力の濃度を上げていき最後に身体を力に重ねるようにイメージすると一瞬の発光の後に、元の自分を成長させたような感じになりました。

少し身長が伸びてますね175cmくらいでしょうか。まあ、それはとりあえず後でいいです。まずは周りの修復の魔具を造らないといけません。

創造したものはただのバット（木製）。能力のイメージは某天・ちやんが使っているアレです。なんだかこれを持つとフルスイングしなくなりますね。

では、気を取り直して元の状態にもどれと念じながら魔力をこめ、手首を使って軽くまわします。

「あの独特のフレーズが流れる♪」

うん、どうにかなるものですね、ただのバットに周囲のものの時間を巻戻すという概念を貼り付けたようなものなので、魔力消費が半端じゃありませんがどうか使えます。

でもこれは完成度が低いですね。無駄が多すぎて能力を引き出しきれません。なのですぐに破棄しました（大量の魔力を流し込めば耐え切れずに塵になるんです）

いろいろ試して慣れていくために修行しないといけませんね、ならばアレ（・・・）を造ってみましょうか。

そうですね！修行と言ったらダイオラマ魔法球です！！今回造ったのは1時間を5日にする物です。超強力です。魔力が無限にあるからこそできる荒業です。この中で魔道具製作を極めてあの計画を実行するのです！

エターナルロリータ保護計画を！！

つと、人がこっちに向かって来ているようですね。早く此处を離れ
ましょうか。

第3話 よろしい、ならば確認だ（後書き）

後書き

すぐにわかると思いますが、造る物はカシオペアですね。

無限の魔力と10年×365日×24時間×5日＝438000日
1200年ありますからどうにかありますよね（汗）

修行の基本は、魔力と気の効率化です。

完成が^{ジ・エンド}あればすぐにできると思いますので

次回はキングクリムゾンします。

最後にヒロインとアーティファクト案を募集します。

誰か、意見をください

第4話 よろしい、ならば計画準備だ（前書き）

修行回です。とはいっても完成があるのでサクサクいきます。戦闘描写はありませんが近いうちに入れる予定です。

駄文なので修正が入るかもしれませんがとりあえず投稿です。

第4話 よろしい、ならば計画準備だ

リゲルSIDE

まずは、エターナルロリータ保護計画の説明をしよう。

この計画は時間跳躍の魔道具を造りエヴァが吸血鬼化した直後に保護し、自衛できる程度の魔法を教えようと言う計画である。

この計画は魔法の師であり恩人という立場につけ、正義の魔法使いからエヴァ自身を護ることができるといふすばらしい計画だ」「どこいきやがった!」・・・すばらさ「まだ近くにいるはずだぞ捜すんだ!」・・・計画であら「みつけたぞっ!」・・・(グスッ)

「そこにいるぞ!捕まえる!」

「何だこの猫は?魔獣なのか?」

「これだけ魔力を持った猫なんてこの世界にいるはずないだろ!」

「おいっ!そっちにいったぞ!」

「任せろ!」

「ハアハア・・・もふもふ・・・ふわふわ・・・ジュルリ」

ただ今、正義の魔法使いに追われております。そして最後のやつが怖い（ガクブル）　何か大切なものを失いそうな気がする。少し危機感（貞操の）を覚えながら猫特有の動きで回避し続ける。さて、何故こんな事になったのかというと・・・

服を着ていないため猫になって逃走

↓魔力が少しもれてて見つかる

↓正義の魔法使いたちが魔力を持った猫⇨魔獣⇨悪と判断して問答無用で捕獲しようとしてくる

↓逃走中↑今ここ

という訳で追われているのです。

「おいっ！ちゃんと捕まえろ！」

「お前こそしつかり追い込めよ！」

「「お前らバカだな」」

「「何だとっ！」」

「魔法使えばいいだけだろうがっ！　『風の精霊11人。縛鎖となつて敵を獲れえろ！　魔法の射手・戒めの風矢』」

やっと魔法を使ってきました。今すぐにも逃げる事はできますがチャンスですから視ておきくべきです。

「チツ！はずしたか。」

「しっかり狙えよ！」

「（フツ）下手だな」

「なんだとっ！」

「なんだ？戦るのか？」

「本当の魔法の使い方を見せてやろう！」

「上等だ戦ってやろうじゃねえか！」

「（フツ）格の違いを思い知るが良い！」

・ ・ ・ ・ ・

その後、見つからないように隠れながら正義の魔法使いの魔法を視て「魔法の射手」などの魔法を完成させました。あの後正義の魔法使いの皆さんは仲間割れでぼろぼろになりながら帰って行きました。そして私はというと・・・

「『魔法の射手 速弾・氷の17矢』」

トーン！

魔具で認識障害と人払いの結界を張り、魔法発動媒体として短めの

杖を造りだして魔法の練習中です。魔法を覚えなくても魔具を使えばいいのだけなのですが、使える手札^{カード}が多いに越したことはありませんし、エヴァに教えるつもりならば自分がその魔法を理解していなければなりません。なので実際に使ってみているわけなのですが、少し問題がありまして・・・

「使える魔法が少ないですね。」

その問題とは、見た魔法が圧倒的に少ないということです。さすがに正義の魔法使いさん達も仲間割れでは強力な呪文を使っているんですけど（使えなかっただけかもしれないが）。

見たは完成のおかげで十全以上に使いこなすことができるのですが、視ていない魔法はどうしようもありません。ですから今使える魔法は

1 魔法の射手

2 武装解除

3 治療

4 認識阻害

5 障壁

の5つしかありません。なので今の私の攻撃方法は魔法の射手だけなのです。教えることもできませんし魔法だけでは自分の身も守れません。（魔力でゴリ押しすれば話は別ですが）

ですから今は魔法の修行に専念します。計画を後回しです！まずは魔法世界に行ってみましょうか………

キングクリムゾン！！

あれから3年が経ちました

私は魔具をいくつか使って魔法世界に渡り、様々な魔法を視てきました。あれからやったことといえば

旅費を稼ぐために剣闘大会に参加して対戦相手の技を本人以上に使いこなすプライドをへし折ったり、とある国の魔法庫に侵入しありとあらゆる魔法書を読破したり、紛争地帯に近い村を巡り治療して

回ったり、紛争で身寄りのいない孤児達を村に連れてきたり、そこを襲撃してきた（自称）正義の魔法使いを殲滅したりしてました。最初は殲滅することに抵抗がありましたが、奴らがやっている犯罪の数々を知ってからは情け容赦なく一人も残さず処分しました。あいつらは嫌いです！

おかげで正義の魔法使いからは『^{ダークレイザー}黒の抹殺者』、『^{ヘルキャット}死を運ぶ黒猫』、『^{サイレントテラス}無音の掃除屋』、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』と呼ばれ、紛争地帯の村では『^{ヒーラー}癒し手』、『もふもふ様』と呼ばれていた。（この頃ネコ派が圧倒的に増えた）

十分なほど技を磨いた私は、計画を実行ために魔具を造り始めた・・・

第4話 よろしい、ならば計画準備だ（後書き）

どうだったでしょうか？

あまり文才がないので雑な話ですみません。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

次回、エヴァとの邂逅です。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (前書き)

読み直しては改定を続けています。

一話に付き数回は改定しているという衝撃の事実……
はぁ……

エヴァの過去を書いてみましたがおリジナルです。

グロいです。苦手な人にはお勧めできません。

シリアスも入ってます。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1)

リゲルSIDE

ふうやつと完成しました。これこそ私が造った時間跳躍魔具、その名も『ベテルギウス』。これは使用者の魔力を大量に吸い取りますが、簡単に時間や場所を指定できるという素晴らしいものです。・・・えっ？でもエヴァンジェリンのいる場所が分からないから駄目だろう？と言いましたか？

心配には及びません。こんなこともあるつかと造っておいたのがこの古めかしい「長杖」その名も『導きの長杖』^{ガイダンス}といい、その効果は某便利な未来のロボット猫のとある道具の数倍以上の効果です。これで大体の方向がわかるのでその方向へ行けばいいだけです。我ながら素晴らしいものを造ったと自負しています。

これで安心して計画を実行できます。一応切り札も造っておいたのでもし戦闘になっても負けるはずがありません。それでは、

『ベテルギウス待機状態』^{スタンバイ} 設定開始 座標指定「イングランド」^{プログラミングスターポイントセット}
タイムセット
時間指定「600年前」 設定終了 待機状態解除 起動まで(力
ウントダウン) 5, 4, 3, 2, 1, 0 ベテルギウス始動しま
す』

それでは目的を果たしにいきましょうか……………

エヴァンジェリンSIDE

私はここで死ぬのだと思った。体のいたる所に傷があり、血が付いている。今は亡きアイツにかけられた呪いでこの体になってからは傷がすぐに治るのだが、この一週間休む間もなく襲撃してくる人たちによって身も心も限界だ。

目の前には光のようなものを飛ばして攻撃してくる杖を持ったたくさんの人たちがいる。私は逃げようとするが体が全く動かない。そして私は近づいてくる光の束を見ながら目を閉じた……

十数年前

私はとある国の辺境伯の娘だった。両親と我が家につかえている執事やメイドさんたちと一緒に幸せに暮らしていた。毎日が楽しくて、優しい人たちに囲まれて私は幼いながらに自分が幸せなのだと感じていた。だが、私の10歳の誕生日にすべてが変わった。

その日はみんな舞踏会の準備に忙しくて私は一人ぼっちだった。私の誕生会の準備の為なのだというのもわかっていたし、我儘を言っただけなのに準備してくれている人たちが心から祝福してくれている人たちに迷惑をかけたくなかった私は自分の部屋ベットのうえで人形遊びをしていた。

そして、遊んでいるうちにいつのまにか寝てしまったみたいで、起きたらもう外が暗くなっていた。もう舞踏会が始まっていてもおかしくない時間なのに誰も呼びに来ていないことを不思議に思いながら私は急いで部屋を出た。

既に、舞踏会が行われているはずだから急いで大広間に向かった。使用人の人たちとすれ違うのに少し不安を感じながら大広間の扉に手をかける。扉が厚くて聞こえないが、中は少し騒がしいようだ。多分私が未だに来ていないことのせいなのだと思います、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら扉を開けたと同時に中から叫び声が聞こえた。

そこには地獄が広がっていた

「いやあああああ――――――――――！！」

「痛いっ！痛いようっ！」

「誰か助けてくれ！まだじにだぐない」

「あしっ！わだじのあしがないの！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこには、血まみれになった人、足のない人、内臓が出ている人、すでに息絶えた人たちがいた。

私は一瞬で何が起こっているかわからなくなり何もしゃべることができなかった。だから一人のヒトが近づいて来ていることに気がつかなかった。

「ごきげんようお嬢さん。君が今夜の主役かい？」

話しかけられた瞬間、私の周りの時間が止まった気がした。すぐそこには全身黒い服を着た若い紳士のような恰好をした人がいる。

一目見ただけで気づく強烈な違和感、原因は一両手に持っている血まみれのナイフ。

それは、この惨状を起こしたのは自分であると宣言していることと同義である。私の体が震えだす。生まれて初めて感じる死の恐怖が体を支配する。逃げたいと思うが逃げられないことは確実だ、なぜならすでに私の目の前に彼はいるのだから。

「余興は気に入ってくれたかい？少しでも楽しんでくれたなら満足だよ。」

私は彼の言っていることが理解できなかった。この惨状を余興といった彼のことも理解できるはずがなかった。

「エヴァ！はやく逃げるんだ！」

「はやくその男から離れなさい！」

そこに両親の声が聞こえた。無事であったことを喜びながらそちらに向くが、次の瞬間っ！

「今は僕が彼女と話しているんだ。邪魔しないでくれないかい？」

ズシュッ！

嫌な音が聞こえたと同時に、胸からナイフの柄を生やした両親が仰向けに倒れた。

「あつ、えっ？」

目の前の光景が理解できない。両親の胸から血がどんどん出ていて、うめき声をあげている。このままでは両親が死んでしまうという事実が理解が追い付かない。

「こんなまったく面白くない田舎に立ち寄ったら、ここの領主の娘が誕生会を開くと言ったから見に来たのさ。馬車を襲って入ってきたのはいいけど、主役がいなかったから適当に話を合わせながらその辺の豚と話してたけど自慢ばかりで面白くないし、かといって雌豚どもは臭い香水の匂いをさせながら色目使って来るからつい苛々して殺しちゃった？」

でもそのおかげで君の素敵な表情も見れたからあいづらにも感謝しないといけないね。それはさておき、キヨウはキミの誕生日だね♪だから君に素敵なプレゼントをあげよう。これは僕がいつか不老不死になるための研究してきたことによつてできたモノ。不完全だけど不老不死と強大なチカラを与え、その身を闇に落とす『呪い』。その実験台第一号の称号を君にあげよう♪」

彼が何かを唱え始めるが、私はそれを聞いてはいない。目の前の両親を見続ける。

「♪汝にそのチカラを与えん。ふう、じゃああげるよ。この呪い^{チカラ}を・・・」

突然目の前が真っ黒になる。そして体の中のナニカが変わっていき熱いものが注がれる感覚して身を裂かれるような激痛が走る。やつと痛みが去り目が見えるようになると目の前には両親を傷つけ、大切な人たちを殺したヤツがいた。その瞬間、私は感じるがままにチカラを振るう

「おまえがつ！おまえがあ~~~~~！！」

私の右手が彼の胸に突き刺さる。

「ごふっ！なんだこの力は！？吸血鬼にただけのはずなのに！こんな力があるはずがない！こんなことはあり得ない！僕が死ぬなんてことあるはずg~~~~~！！」

ヤツは声にならない叫び声を出しながら燃え始めた。その炎は黒く、周りに燃え広がってゆくが私は急いで両親の元に駆け寄る。

「とうさま！かあさま！」

両親を呼びながら肩を揺らす・・・だが両親はすでに息を引き取っていた。

その夜、一人の少女の慟哭が燃える屋敷の中に響き渡った・・・

エヴァンジェリン SIDE

いつまでたつても痛みがこないことに気がつく。目を開けて確認しようとする、頭上から声が聞こえてきた。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛いお嬢さん？」

そこには、黒い髪をした男の人が立っていた。その人を見た瞬間、「トクンッ」と胸が高鳴った気がした……

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (後書き)

更新がきついです。

内容は変えませんが後で改定します。

評価、感想、ヒロイン、アーティファクト案待ってます!!

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (前書き)

明日は休みだからストックを貯めておきたいです。

2話更新できたらしいな・・・

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2)

リゲルSIDE

ベテルギウスを使つて時間跳躍した私が一番初めに見たものは数人の魔法使いから放たれたであろうたくさんの『魔法の射手』でした。たった三年でしたが密度の濃い生活(逆恨みされてよく襲撃されていました)をしてきた私は一瞬で気持ちを切り替え、すぐさま周囲を確認し、私の魔法発動媒体である指輪をつけます。目の前には複数の魔法使い達があり、『魔法の射手』を放っています。その狙いの先には小さな金髪の少女が傷だらけで倒れています。私はすぐさま無詠唱で『多重超高密度魔法反転障壁』を少女の周りに張りめぐらせます。

これは3年間の修行期間時に創り出したオリジナルスペルのうちの1つで多重高密度魔法障壁に大量の魔力を流し密度を底上げし、障壁内で循環させることで外部からの魔法を強引に吸収し障壁に編みこんである反射魔法と増幅魔法カウンターによってその魔法を倍返しにするという極悪な障壁です。いつもは攻撃を受け流すように超高密度魔法障壁を薄く張るだけですが、何故か使う魔法を間違えてしまいました。

けっ決してわざとなんかじゃありませんよその小さな少女がエヴァンジェリンだとすぐに気づいたからなんてことは決してありません。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

周囲は木々に囲まれており気絶した魔法使いの集団たち以外には誰も居なさそうなのでそこにいる少女に声をかけます。

その姿はまさに満身創痍で、私は彼女が口を開く間も与えずに彼女を抱き上げすぐさま周囲を魔法で探り、見つかりにくいであろう場所に向かいます。

「えっ！あのっそのっ・・・キュウ／＼」

彼女は少し慌てたようなくさをした後何故か気絶してしまいました。こんな状態ですからきつと疲れていたのだと思い、彼女が休めるように準備を始めます。まずは周囲に認識障害と人払いの結界を張り（もう魔具を使わなくても簡単に結界が使えるようになりました）ダイオラ魔法球を取り出します。周囲に索敵の魔法をかけた後、少女と一緒に魔法球に入ります。

さて、彼女の目が覚めたらまずは説明しなければいけませんね・・・

ふと、目がさめる。

自分はベットに寝かされているようだ。身体を起こして傷の具合を確かめるともう完全に治っていた。自分は何故こんなところで寝ているのだろうかを考える。あの変な集団に襲われてからの記憶がはつきりしない

コンコンッ

「っ!」

すぐさま起き上がり周囲を確認してすぐ身動き出せるように身構える。すると、黒髪の十代後半ぐらいのかっこいい男の人が料理を持つて入ってくる。

「調子はどうですか？ほとんど治っていましたが傷は治療せて貰いましたけど、どこかおかしいと感じるところはありませんか？」

しばらくの間、声が出ない。その様子を見て男の人は慌てた様子で

「どこかおかしいところがあったんですか？すぐに見せてください」
「！」

と言ってきた。しばらく放心していた私だが、倒れる直前のことを

思い出し顔が熱くなっていることを自覚しながら肝心なことを聞く。

「助けてくれたのか？」

少し警戒しながらこの数年で身につけた少し威圧するような口調で彼に問う。

「そうですよ。まずはこれを食べてください。お腹が空いているでしょう？本当は服も用意したかったのですが、女物の服なんて持っているわけがないので・・・」

その言葉に警戒を少し強める。なぜ見ず知らずの自分にこんなに優しくしてくれているのか判らない上に傷が治るところを見られたのだ。しかもそれを気味悪がるわけでも無く私に話しかけてくる。

本来ならすぐに逃げ出すところだが此処は彼の家のように、私はこのことは全くわからないし何処に逃げればいいのかもわからない。そして一番の理由は逃げたとしても逃げ切ることはできないからだ。どんな方法を使ったのかは知らないが私を追ってきた人たちを一瞬で倒してしまうほどの人なのだから、私が逃げ切れるわけが無い。だから私は彼から少しでも情報を聞き出そうと彼に話しかける。

「ここはどこだ？」

「私の所有している別荘ですよ。ああ、自己紹介を忘れていました。私の名前はリゲルといいます。化け物どうし仲良くしてもらえると嬉しいです。真祖の吸血鬼エヴァンジェリン？」

一気に警戒を最大にして彼の動きから目を離さない。少しでも油断しないように、彼が油断した瞬間に全力で逃げられるようにしつつ、気になることを言った彼に問う。

「確かに私は吸血鬼だ。だが真祖とはどうゆう意味だ？そして何故名前を知っている！」

「そのままの意味ですよ。あなたは真祖の吸血鬼、ハイデライトウォーカーですよ。でなければ吸血鬼がこの日差しの中で十分に動けるわけが無いでしょう？何故名前を知っているのかというとななを探していたからですよ。」

たしかに、この身体になった頃は大変だったが今はもう大丈夫だ。この男は本当のことを言っているのだと判断して少しだけ警戒を緩める。だが、まだ聞きたいことはある。質問には答えてくれるようだからじっくり聞いてみるとしよう……

リゲルSIDE

あれから彼女はあらゆることを聞いてきた。できる限りのことは答えたが、「何故私のことを知っているのか」と「お前が化け物というのはどういう意味だ」という質問には嘘を答えた。この二つの質問

は今答えるべきではないと判断したからだ。そして質問の嵐が終わった後、彼女は少しは警戒を解いてくれたのか先ほどのような口調ではなく見た目相応の口調で

「助けてくれてありがとう。あと、食事もありがとう。」

と言って、私がつってきた料理を食べ始めた。そして彼女が食べ終わる時間を考えながら紅茶を入れる。

「はいどうぞ。食後のお茶です。」

「あっありがとう／＼／」

でも何故だか先ほどから彼女は目を合わせてくれません。何故でしょう？

「あっあのう・・・」

「はい、なんですか？」

そんなことを考えていると彼女が話しかけてくれました。

「よかつたらなんですけど、わっ私のことを・・・そのっ・・・えっエヴァって呼んでくれませんか？／＼／」

えヴァあのターン

えヴあはなみだめ＋うわめづかいであいしょうでよぶようによつき
ゆうしてきた

ゆうきはりせいがほつかいしそつだ。こつかはばつぐんだ！！

りげるのターン

りげるはすぐさまようきゆうをのんだ。

りげるはえヴあのがおをかくとくした！

その後私は彼女をエヴァと呼び、エヴァは私のことをリゲルと呼ぶ
ことが決まりました。

「ごほんつ、それではエヴァに大切な話があります。これから話す
ことはこの世界の最大の秘密のひとつであり今後エヴァが生きてい
く上で必ず関わることになるものの話です。聞いてくれますか？」

「うん。それはさっきの人たちのこと？」

「そうです。彼らが使っていたモノの正体は魔法でそれを使う彼らは魔法使いです。そして私も彼らと同じ魔法使いです。ですが私はエヴァの味方ですから安心してください。ここまではいいですか？ それでは説明を続けますね。まずは、魔法のことを説明します。そもそも魔法というものは・・・・・・・・・・」

そして私はエヴァに魔法のこと、魔法世界のこと、既にエヴァが魔法世界で賞金首になっているだろうことを説明した。

「そして何故私がある」エヴァ！「・・・・・・・・エヴァを探していたかと言つと、エヴァが身を護れるだけの力をつけさせるためです。私も化け物ですから、力の無い化け物がどうなるかは簡単に想像が付きます。先に言っておきますがこれは強制ではありませんし、私に護つて欲しいと言つならそれでもいいのですがいつまでも護り続けると言つことには無理があります。なので私は、魔法を教えたいと思つています。エヴァはどうしたいですか？」

エヴァは少し考えるような仕草を見せた後まっすぐに私の目を見て

「私に魔法を教えてください。」

と言つてくれました。だから私は、まず魔法の危険性と本質を教えるていきました・・・・・・・・

エヴァンジェリンSIDE

「エヴァはどうしたいですか？」

そう聞かれたとき私は迷った。新しい力、大きな力を手に入れると言うことは利点もあれば欠点もある。これは自分自身が体験してきたことだからいやと言うほどわかる。力をつければ今の敵には勝つことはできるかもしれないが、より多くの強い敵を呼び寄せることになる。それに比べて強い彼に護ってもらえるという案はとても魅力的だった。彼は強いから負けることは無いと思うし、最低でも逃げ切るくらいはできると思う。そして、彼と一緒にいられる。だがそこで私は重要なことに気が付く。私が彼の足を引っ張ってそのせいで、彼が私を庇って怪我をしてしまうかもしれない。そんなことは耐えられない！護ってもらって、こんなに優しくしてくれている彼に迷惑をかけ続けるなんてことはしたくない！それにいつまでも荷物のままじゃ彼と対等にいられない。そう思った私は新たな決意を胸に彼の瞳をまっすぐに見つめる。

「私に魔法を教えてください。」

絶対に強くなるんだ という決意を胸に彼の話を聞く。今はまだ届かなくてもいつか彼の隣に堂々と立っていられるように、立っている女ひとが自分であるために。そしてこの気持ちをいつか彼に……

.

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (後書き)

リゲル（主人公）は決してロリコンではありません。エヴァは一応合法ロリです。だから今はまだ手は出していないかもしれませんがもし出したとしても大丈夫なんです！もし駄目でも可愛すぎるエヴァが悪いんです！そうに違いありません！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (前書き)

お詫び

遅れました

投稿する直前全てが消えてしまいました。

思い出して書いてみました。

短いです。本当に申し訳ない

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3)

リゲルSIDE

エヴァと会ってから数年経ちました。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック『氷の精霊21頭。集い来たりて敵を切り裂け！ 魔法の射手・連弾・氷の21矢』！」

「その程度じゃ掠りもしませんよ？」

私は今、エヴァと1日に1回の模擬戦をしているところです。これはエヴァに戦闘経験を積ませる為であると同時に、私が修行の成果を見極めこれから何処を鍛えるのかを見極めるためでもあります。エヴァに戦い方を教えるに当たって、私は魔法だけでなく体術も同じように教えてきました。なぜなら魔法が使えない場所もありますし、魔法発動媒体をとられたりその他の使えない状態に陥ったときに身体ひとつである程度戦えないと困ると言う自分の経験から、両方を教えることにしました。

「戦闘中に考えることなんて余裕だな？ ハア！」

そう言いながら、エヴァは蹴りからの突きを放ってきます。私はそれをかわし、捌きます。

「そんなことないですよ？最近は少し危ない時が増えてきてますし技も魔法も上達していますよ。」

エヴァと修行し始めてから魔法球を使用していたので実質50年ほど経っています。もう既に私が今まで戦ってきた人たちが束になっても片手で叩きのめすことができるほど彼女は強くなったと思います。

その間にも、エヴァを狙った襲撃は絶えることがありませんでした。なのでその人たちはエヴァの経験の糧になってもらいました。その時エヴァに、殺すつもりで向かってきたものの恐ろしさを知ってもらいました。そして相手を殺すということも経験してもらいました。でないと私がいなくなったときにすぐに殺されてしまうかもしれません。それほどにまで殺す覚悟の有無は勝敗に関わってくるのです。

でも50年ほどそんな生活をしていたせいでしょうか？最近エヴァの口調が威圧的になってきました。もしかすると反抗期でしょうか？そうならとても寂しいです。

「ッ！（模擬戦中にそんな顔をするな！／＼）・・・ふ、フンッ！いくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪』！」

蹴りをかわした直後にエヴァが魔法を放ってきますが、虚空瞬動でかわします。そして即座に魔法を放ちます。

「まだ修行が足りませんよ？」 紅き焰 「」

「チィ！」 氷楯 「！」

エヴァは魔法をつかって防ぎますが、一瞬私のことを見失った隙にエヴァに手刀を突きつけ、模擬戦の終了を宣言します。

「はい、では此处までです。大分強くなってきましたね。」

「私の攻撃は掠りもしない癖して良くそんなことが言えるな？」

でもエヴァは本当に強くなりました。本人はあまり自覚していないようですが、もう十分に最強レベルに到達しています。後エヴァに足りないものは経験だけです。もう私が教えられることはほとんどありません。

だから、そろそろお別れです。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

少し考え込んでいたみたいですね。表情に出てしまったのかエヴァが心配してくれます。口調は変わっても優しいところは変わらないので嬉しいです。

「いえ少し今後の修行ことを考えていました。で、そのことなのですが、テストをしたいと思います。」

「テストか？今回は何をするんだ？」

今までもテストは時々やっていました。どここの盗賊団を倒せだとか、龍を一匹倒して来いとかですが。いつのまにか毎回ご褒美を上げると言うルールができてしまいましたがそれは別にいいでしょう。

このテストが終わったら全てを話して私は元の時代に帰ります。だから最後に弟子の成長を見ておきたいのです。最初は理不尽な力に屈して欲しくないと思って鍛えていました、ですが今では家族も同然です。離れるのは悲しいですが、それも彼女の糧になるでしょう。もともとそのつもりだったはずです。

「明後日メガロセンブリアで行われる剣闘大会に参加して優勝してくる」それがテストの内容です。これは一人で行ってもらいます。私はここで待っていますから、しっかり優勝してきてくださいね？」

「案外簡単だな？てつきり龍の巣でも壊して来いとも言われるかと思ったぞ？」

「そんなことはしませんよ、龍がかわいそうですし。エヴァも簡単にお金が稼げるのでこちらのほうがいいでしょう？じゃあ、晩御飯にしますから、お風呂に入ってきてください。」

「テストの後のご褒美を楽しみにしてるぞ？あと、晩御飯は肉の気分だ。」

「はいはい、わかりました。今日はローストビーフにでもしましょうか？」

今日はいつもより腕によりをかけて作りましょう。

エヴァンジェリンSIDE

私は食事の後ベットに潜り込んで考え事をしていた。少し彼の様子

がおかしかった気がするからだ。ほんの少しだけど実際にそう感じたのだ。この50年間、いつも二人で過ごしてきたからこそ気づくことができた本の小さな違和感だが、何故か気になって仕方が無い。そんなことを考えていると

ガチャ

部屋の扉を開けて彼が入って来る。

「今日もですか？自分の部屋があるんですからそこで寝ればいいでしょう？」

「別にいいだろう／＼私が勝ち取った権利だ！それにリゲルもいと言っただろう？」

「あれはそう言わなかったらエヴァが泣きそうだったからでしょう？あれはずるいです。」

「リゲルも何でもいいといったくせに嫌だと言っからじゃないか！」

「それもエヴァが泣きそうになりながら言ってきたからでしょう？」

「うるさい！／＼いつまでも昔のことをいう男はもてないぞ！」

「別に好きな人が居る訳でも、誰かに好かれている訳でもないですよ。うから別にいいですよ。」

流石に少し頭にくる。多分コイツは私のことを妹の様にしか見ていないのだろう。よく考えればわかることだ。こうやって私が何を言ってもすぐに言い返してくる。

でも私はそんなところでは満足できない。妹なんかじゃくて、私は・

「エヴァ、ボーっとしてないでもう少し詰めて下さい。流石に少し狭いですよ。」

「・・・はあ」

時々心が折れそうになる。まあ、こんなだから他の虫が付く心配が無いのだが、このままじゃいつまで経っても妹のまま・・・そのうち誰かがこの朴念仁の魅力に気づいてしまうかも知れない。そしていつかその誰かと結ばれて、私を措いていつてしまうかもしれない。そんなことは耐えられない。

だから今度のテストのご褒美はもう決めてある。このテストが終わったら、この気持ちを伝えてその答えを貰うんだ！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (後書き)

本当は二話投稿する予定でしたが、時間の問題と一回消えてしまったことよる精神的ダメージで1話だけになりました。
次回はお別れです。

よろしい、ならばアンケートだ（前書き）

ヒロインアンケート&それに伴うアーティファクト募集

よろしい、ならばアンケートだ

作者のミケと申します。

にゃんこ(?)に転生ですか？　よろしい、ならばネギま！に転生だ　の連載を初めて6日が経ちました。いい案が浮かばなかったり、感想をはじめてもらって喜んだり、昨日自分の最高傑作だと思った第九話が投稿直前に消えてしまったりいろいろなことがありました。

さて、大分話は変わりますが、ただ今この駄文の状況は
累計PV67,174アクセス　ユニーク10,837人　総合評価493pt・・・

正直ビックリです。私の駄文がここまで読んでもらえるとは思っていませんでした。

なので皆さんには、心からの感謝を　ありがとうございます。

さてさて、皆さんお解かりだと思えますがアンケートです。

エヴァはもう決定です。これは、最初から決まっていたので、外せません。なので、エヴァいがいの人を入れるのなら、ハーレムにするつもりです。

そこでアンケートです。

1つ目はハーレムにするのかということ

2つ目は誰をヒロインにしたいかということ

3つ目は全く関係ありませんがアーティファクト案募集

この3つのことについてアンケートをします。書き方はお任せしますので好きなように書いてください。

感想からでも、活動報告のコメントからでもOKです。でもちゃんと判る様にしてくださいね？

3つ全部書く必要ありませんから気軽にお願いします。

たくさんの人たちからのご意見をまっています〜！

よろしい、ならばアンケートだ（後書き）

く予告く

今日中に最低1話投稿します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0406y/>

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

2011年11月4日13時03分発行